

人馬

楠山正雄

青空文庫

むかし、三人の坊さんが、日本の国中を方々修行して歩いていました。四国の島へ渡つて、海ばたの村を托鉢して歩いてるうちに、ある日いつどこで道を間違えたか、山の中へ迷い込んでしまいました。行けば行くほどだんだん深い深い山道に迷い込んで、どうしてももとの海はたへ出ることができません。そのうちにだんだん日が暮れてきて、足もとが暗くなりました。気をあせればあせるほどよい道が分からなくなつて、とうとう人の足跡のない深い山奥の谷の中に入り込んでしまいました。もう道のない草の中をやたらに踏み分けて行きますと、ひよっこり平らかな土地へ出ました。よく見ると、人の家の垣根らしいものがあつて、中には人が住んでいるようですから、坊さんたちは地獄で仏さまに会つたようによるこんで、ずんずん中へ入つてみますと、なるほど一軒そこに家がありました。

でもよく考えてみると、こんな人の匂いもしそうもない深い山奥にだれか住んでいるというのがふしぎなことですから、きつと人間ではない、鬼が化けたのか、それともき

つねかたぬきかが化かすのではないかと思つて、少し気味が悪くなりました。けれど何しろくたびれきつて一足も歩けない上に、おなががすききつているものですから、もう鬼でも化け物でもかまわない、とにかく休ませてもらおうと思つて、その家の戸をとんとんたたきました。

すると中から「だれだ。」といつて、六十ばかりのおじいさんの坊さんが出て来ました。何だかこわらしい、食いつきそうな顔をした坊さんでしたけれど、今更どうにもならないと思つて、三人は上へ上がりました。するとあるじの坊さんは、

「お前さんたちはおなががへつたろう。」

といつて、ごちそうをお盆にのせて出してくれました。ごちそうは大へんうまかつたし、あるじの様子も顔に似合わず親切らしいので、三人はすっかり安心して、食べたり飲んだりしていました。

夕飯がすんでしまうと、あるじの坊さんは手をならして、

「これこれ。」

と呼びますと、もう一人のやはりこわらしい顔をした坊さんが出て来ました。何をいうかと思つと、

「御飯ごはんがすんだから、いつもの物ものを持っておいで。」

といつつけました。坊ぼうさんはうなずいて出ていきました。いったい「いつものもの」というのは何なんだろうと、三人にんは物ものめずらしさが半分はんぶんに、気味きみ悪わるさが半分はんぶんで、何なにが出るかと待ちまうけていますと、やがてさっきの坊ぼうさんが、大きな馬うまのくつわと、太ふといむちを持つて戻もどつて来きました。するとあるじはまた、

「それ、いつものとおりにやれ。」

といつつけました。

「何なにをするのか。」と思おもつていますと、もう一人ひとりの坊ぼうさんは、いきなりそこに座すわっている三人にんのうちひとりの一人ひとりをそれは軽かる々と、かごでもつるすようにつるし上げて、庭にわにほうり出だしました。そして持つて来きたむちでその背せ中なかをつづけぎまに五十たび打うちました。坊ぼうさんはぶたれながら、ひいひい悲かなしそうな声こゑを立てたてましたが、あとの二人ふたりはどうすることもできないので、立たつたり、座すわつたり、気きをもんでばかりいました。そのうちとうとう五十たびぶつてしまうと、こんどは着物きものをはがして、裸はだか体たの上うへをまた五十たび打うちました。すっかりでちようど百たび打うつた時とき、もうだんだん虫むしの鳴なくような声こゑでそれでもひいひいいていた坊ぼうさんは、急きゆうに一声ひとこゑ高く「ひひん。」と、馬うまのいななくような声こゑを出だしました。

その拍子ひょうしに顔かおが急きゆうに伸のびて、馬うまのような顔かおになりました。みるみる体からだが馬うまになって、たてがみが立たつて、しつぽがはえて、手足てあしを地じびたにつけて、ひよいと立たちますと、もうそれはりつぽな四本ほんの足あしになつて、砂すなをけつていました。それはどこから見みてもほんとうの馬うまに違ちがひはありませんでした。

鬼おにの坊ぼうさんは、その馬うまにくつわをかませて綱つなをつけて、馬屋うまやへ引ひいていききました。あとふたりの二人ふたりは目の前まえで自分じぶんの仲間なかまが馬うまになつてしまつたので、自分じぶんたちもいずれ同じおなじめにあうのだらうと思おもうと、生いきたそらはないので、真まつ青さおな顔かおをして、ぶるぶるふるえていました。するとさつきおにの鬼おにの坊ぼうさんは、また戻もどつて来て、こんどは二にばんめぼうの坊ぼうさんを庭にわに引ひき下おろして、同おなじようにむちで百ひゃくたびぶちますと、これも馬うまになつて、「ひひん。」といいななきながら四よつ足あしで立たちました。その時とき鬼おにの坊ぼうさんはむちをほうり出だして、

「ああ、くたびれた。少し休やすもう。」

といつて、汗あせをふきますと、あるじの坊ぼうさんも、

「どれ、飯めしを食たべて来るかな。」

といつて、立たち上あがりしました。そして行きがけに、もう一人ひとり残のこつてふるえている坊ぼうさんをこわい目めでにらめつけて、

「そこにじつとしていろ。すぐに戻つて来るから。」
 といって、もう一人の鬼の坊さんと奥へ入つていきました。

二

その後で坊さんは、心の中で一生懸命に祈りをしながら、「どうしたら逃げられるか、せつかく逃げ出しても、つかまつて殺されれば同じことだし、つかまらないまでも、この深い山の中では、道に迷つて行き倒れになるばかりだ。」と思つて、ぐずぐずしてきますと、あるじの鬼がふいと奥から声をかけて、

「裏の田に水はあるか。」

と聞きました。坊さんはこわごわ立つて、戸をあけて、裏手をながめますと、そこに深い田が出来ていて、水がいっぱいあふれていました。「あの深い水たまりの中に、自分たちをつき落として殺すつもりではないか。」と気味悪く思いながら、坊さんは戻つて来て、
 「田に水はございません。」

と答えました。

鬼は、

「ううん。」

といつて、またばりばり何かをかじつて食べる音がしました。なかなか大食いだとみえて、さんざん食べたり、飲んだりして、こんどはおなかがかくちくになると、鬼は二人とも、ぐうぐう高いびきをかいて寝込んでしまいました。

鬼共のいびきの音を聞くと、坊さんはほつと息をつきながら、今のうちに逃げ出そうと思つて、もう真つ暗になつた山道をやたらに駆けていきました。やがて向こうのこんもり木の茂つた中からぼつんと一つ明りが見えて、家がそこにありました。こんどもまた鬼の住いではないかと、気味悪く思つて、そつと前を通り抜けて駆けていきますと、うしろから、

「もしもし、どこへ行くのです。」

とやさしい女の声で声をかけられました。坊さんはぎよつとしながら、振り返つてみますと、若い女でしたから、やつと安心して、

「道に迷つた旅の修行者でございしますが、三人のうち二人まで仲間をなくしてしまいました。」

「と、今し方出会ったふしぎな出来ごとを残らず話しました。すると女は大そう気の毒がって、」

「じつはわたしも鬼の娘です。永年あなたと同じような気の毒なめにあった人を見て知っています。けれどもそれをどうして上げることができませんでした。でもあなたはお気の毒な人だから、助けて上げたいと思います。もう間もなく鬼がここまで追っかけて来るに違いありませんから、少しでも早く逃げておいでなさい。これから一里ばかり行くと、わたしの妹がいます。そこへわたしから手紙をつけて上げます。」

「と、手紙を書いてくれました。」

坊さんは度々お礼をいって、手紙をもらって、また足にまかせて駆けて行きました。なるほど一里ばかり行くと、松のはえた山があつて、その山の陰に家がありました。そこへ入って、手紙を見せると、若い女が出て来て、

「お気の毒だから助けて上げたいと思いますが、あいにく今は悪い時刻です。」

「と、ふしぎそうな顔をしている坊さんを、いきなり戸棚の中にかくしてしまいました。しばらくすると、どこからか血なまぐさい風が吹いてきて、がやがや人の声がしました。やがて入って来たのは、これも恐い顔をした鬼でした。そしてもう入って来るな」

り鼻はなをくんくんやりながら、

「ふんふん、人くさいぞ。人くさいぞ。」

とわめきました。

「ばかなことをいってはいけません。きつとけだものくさいの間違まちがいでしよう。」

と女おんなはいつて、牛うしや馬うまの生なま々なましい肉にくを切きつて出だしてやりますと、鬼おにはふうふういな
がら、残のこらずががつして食たべた後あとで、

「ああ、腹はらがくちくなくなつた。だが、どうも、やはり人くさいぞ。今いまに探さがし出だして食たべてや
る。」

といつて、またどこかへ出ていきました。

この間坊あいぼうさんは始しじ終ゆう戸棚とだなの中からそつとのぞきながら、びくびくふるえていましたが、
その時女ときは戸棚とだなをあけて坊ぼうさんを出だしてやつて、

「さあ、早はやく逃にげておいでなさい。」

といつて、詳くわしく道みちを教おしえてくれました。坊ぼうさんは涙なみだをこぼして、手てを合あわせて拜おがみながら、ころがるようにして逃にげていきました。何なんでも山やまの中の道みちを三さん里りばかり夢むちゆう中で駆かけたと思おもうと、だんだん空そらが明あかるくなつて、夜よが明あけました。

その時^{とき}にはもういつか村^{むら}の中^{なか}に入^{はい}っていました。
うすう立ち^たのぼっていました。

方^{ほう}々^{ほう}の家^{いえ}からはのどかな朝^{あさ}の煙^{けむり}がす

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人馬

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>